

産官学の連携拠点

「寄付講座」が開設

東京大学

する方策を検討し、将来においても持続可能な下水道システムを創出すること。さらに、講座の研究活動等を通じて、将来の下水道システムの維持管理に貢献するような若い人材を育成するという狙いもある。

国交省の下水道事業課長などを務め、様々なプロジェクトに携わってきた

東京大学大学院工学系研究科に「下水道システムイノベーション」寄付講座が設置された。設置期間は令和2年4月1日～7年3月31日までの5年間。寄付者は東京都下水道サービス（TGS）で、寄付金額は1億9000万円。下水道システムイノベーション研究室内の担当教員は滝沢智・特任教授（都市工学専攻教授）、加藤裕之・特任准教授、野村洋平・特任助教の3人で、今年度は学部4年生2人が所属。研究室は下水道事業者、民間企業等との連携拠点となることを目指している。

講座の目的は、高効率資源循環型・超省エネ型の下水道システムの創出に貢献する技術や制度について調査研究すること、また、大規模災害時において下水道システムの機能確保のためのICT技術の活用や、事業継続計画に



意気込みを語った（左から）渡辺社長、加藤特任准教授、滝沢教授、野村特任助教

TGSが寄付 未来担う若い研究者に

た加藤特任准教授は「産官学の拠点になることが研究室の特長だが、「つなが」をキーワードに活動していきたい。産官学と市民をつなぐこと、様々な分野をつなぐことで新しいイノベーションを起こしていく。また、世代をつなぐことにも特に力を入れたい。若い人に下水道の魅力を感じていただき、下水道界に入ってもらいたいこと、別の分野で活躍する学生にも下水道のことを知ってもらおう活動がこれからの下水道事業の進化・発展につながっていく。研究室に来た皆さんが楽しい気持ちで帰っていただけるようにしたい」と抱負を述べた。

野村特任助教は、学部から修士課程まで岡山大学で土木工学を学び、有害物質を除去する処理技術の開発などの研究をしていた。その後、博士課程では高知大学の藤原拓教授のもとで海水処理技術開発に取り組んだ。農業分野や養殖分野などの専門家と一緒に研究する中で、異分野とつながることの重要性を感じていたという。「学んできたバックグラウンドを生かし、今年度は下水処理水の有効活用に取り組んでいきたい」と述べた。

滝沢教授は「寄付講座の重要な点

は、寄付いただいた運営経費を使って、社会に何を還元していくのかを考えること。従来の教育目的の講座とは違う役割がある。そういう意味では、加藤特任准教授のキャリアの中で培ったネットワークが強みだと思っていける。できるだけ最新情報を社会に還元できるような体制を初年度はしっかり作り、5年間で世間に対する認知度を高めていきたい」と方針を述べた。

寄付者であるTGSの渡辺志津男・社長は「昨年度、会社設立35周年という大きな節目を迎え、下水道事業に貢献する取り組みの一つとして今回初めて、東京大学の講座設置に寄付させていただきました。下水道事業は幅広い分野の知見や経営の視点など総合的、体系的に学ぶ必要があるが、現在そのような場が十分とは言えない。本講座がスタートすることで、未来を担う若い研究者に下水道事業を学ぶ機会を提供させていただき、日本の下水道事業のさらなる発展に貢献していきたい」と期待を寄せ、「TGSはこれまでも現場からの発想により様々な新技術新工法を開発してきたが、本研究室との共同研究などを進めながら実務面で積極的に連携していきたい」と語った。